小長曽陶器窯跡

見てみよう、訪ねてみよう、せとの歴史と文化財

せと歴（れき）!

瓶子陶器窯跡

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見　せと　歴史と文化財を知る見学会

「国指定史跡　小長曽・瓶子窯跡をめぐる」

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

日時：令和２年１０月３日（土）

見学コース：（予定時間）	①午前	②午後	
	９時 30 分	１時 00 分	文化センター北駐車場出発
	９時 50 分	１時 20 分	小長曽窯跡到着
	10 時 30 分	２時 00 分	小長曽窯跡出発
	10 時 40 分	２時 10 分	瓶子窯跡到着
	11 時 20 分	２時 50 分	瓶子窯跡出発
	11 時 30 分	３時 00 分	文化センター北駐車場到着・解散

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

本地大塚古墳（西本地町2丁目）

宮地古墳群（上之山町2丁目）

広久手 30 号窯跡
木造十一面観音菩薩立像（下半田川町）県
木造阿弥陀如来立像（下半田川町）県

古瀬戸瓶子（寺本町）

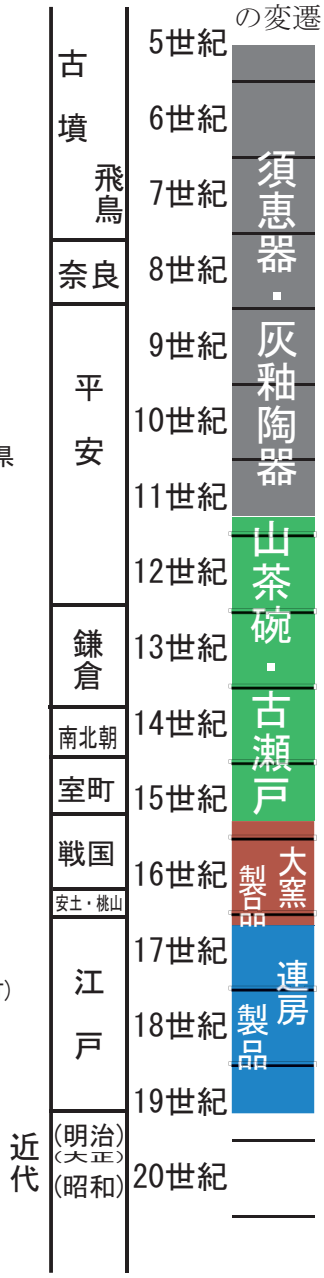
陶製狛犬（深川町）国

瀬戸窯跡【小長曽窯跡】（東白坂町）国
永享年銘梵鐘
聖徳太子絵伝（塩草町）

定光寺本堂（定光寺町）国
織田信長制札（窯町）
菱野郷倉『大般若経』［一部鎌倉］
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】（凧山町）国
源敬公廟（定光寺町）国
笠原村・両半田川村国境争論絵図（東松山町）
石造地蔵菩薩立像（片草町）

陶質十六羅漢塑像（寺本町）
六角陶碑（藤四郎町）
旧山繁商店（仲切町・深川町）国登
瀬戸永泉教会礼拝堂建造（杉塚町）国登
陶製梵鐘（深川町）

やきもの生産の変遷



今回見学する文化財とその関連年表

小長曽陶器窯跡操業（中世）

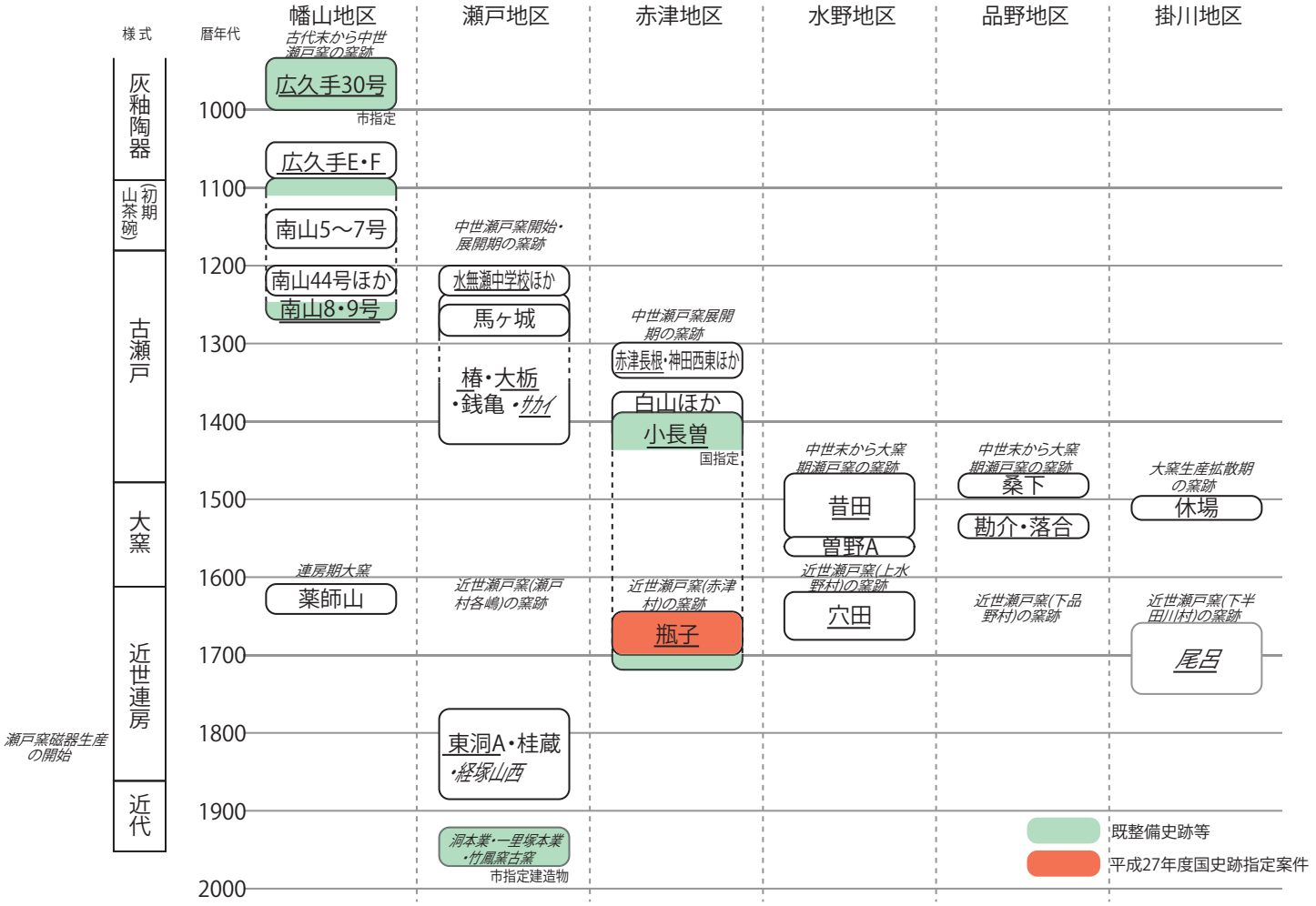
瓶子陶器窯跡操業
小長曽陶器窯跡操業（近世）

国指定史跡「瀬戸窯跡」

1,000 年以上のやきものの歴史をもつ瀬戸市域には、平安時代から今日に至るまでの窯跡が 885 基確認されています。それらの中でも、窯跡の残存状況が良好なものや歴史的・文化財的価値の高いものを、将来にわたって保存活用していくべき遺産として抽出していく必要があります。

しかし、瀬戸市域では、これまで国指定史跡は東白坂町の「小長曽陶器窯跡」1 件のみでした。そこで、平成 11 年度から 18 年度まで窯跡を中心とした市内重要遺跡の確認調査を行い、県内窯業遺跡保存検討会等を経て 101 遺跡を抽出しています。6 月 19 日の文化審議会答申は、瀬戸窯跡全体をまとめて捉え、新たに「瓶子陶器窯跡」を加えるものです。

瀬戸市内重要窯跡等 時期・地区別一覧



※市内重要窯跡は、(財)瀬戸市文化振興財団2008『瀬戸窯 瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告』より引用し記載（斜字は対象外） 遺跡名下線は既発掘調査窯跡を示す。

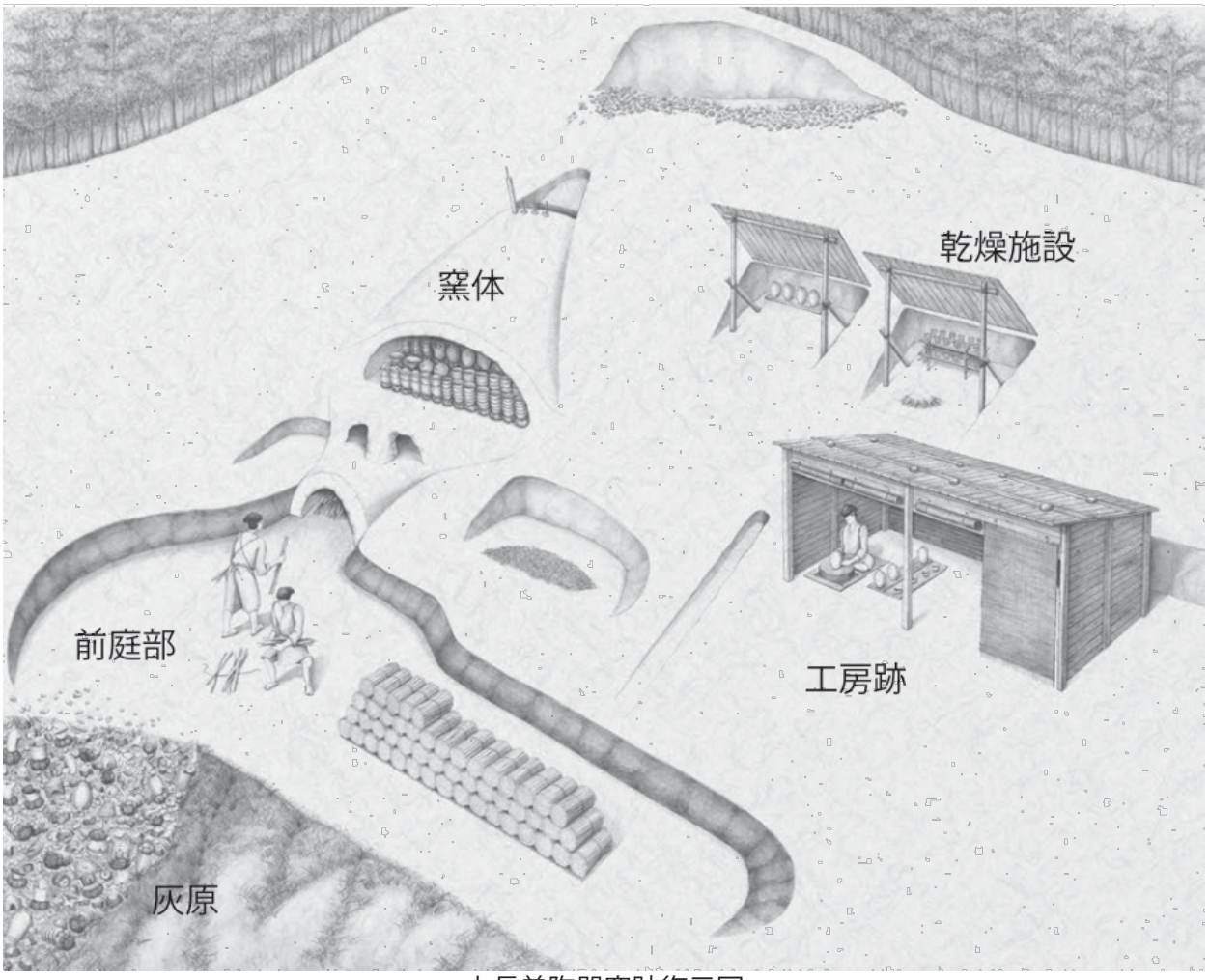
小長曽陶器窯跡

小長曽陶器窯跡は、瀬戸市南東部の猿投山北麓に位置しており、その中で標高 300 mにある小支丘の南側斜面に構築されています。

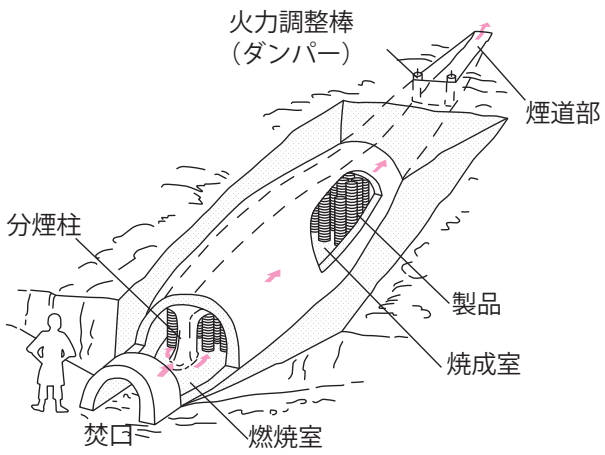
本窯跡は昭和 21 年に瀬戸市ではじめての発掘調査が行われ、昭和 46 年には国の史跡指定を受け、瀬戸市で最初の国指定史跡となりました。その後も数度に渡り発掘調査が行われた結果、現在覆屋内に保存された窯体をはじめ、その手前の前庭部や東側に広がる工房跡、そして、失敗した製品や窯から出た炭などを廃棄した灰原といった、窯業遺跡に一般的にみられる遺構の状況が明らかにされました。

窯体は窖窯と呼ばれる、丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いた簡単な構造のもので、一般的には燃料である薪をくべる焚口・燃料を燃やす燃焼室・製品を置いて焼く焼成室・そして煙突の役割を果たす煙道部からなります。ただし、本窯の場合、焼成室半ばに天井から垂れ下がった障壁と、６個の通炎孔が設けられている点が大きな特徴となっています。また、窯体手前には前庭部が広がっており、ここで当時の工人が生産に関わる一連の作業を行なっていたと考えられます。

一方、窯体の東側で確認された工房跡には大きく上段・中段・下段の３つの平坦面が造成されており、それぞれ異なった機能をもっていたことが明らかにされました。すなわち、下段は窯体手前の前庭部から繋がる平坦面で、やはり前庭部と同様の役割を果たしていた可能性が高く、中段では轆轤を回した痕跡が確認されていることから、ここが製品の成形を行う場所であったと考えられます。さらに上段には柱の穴



小長曽陶器窯跡復元図

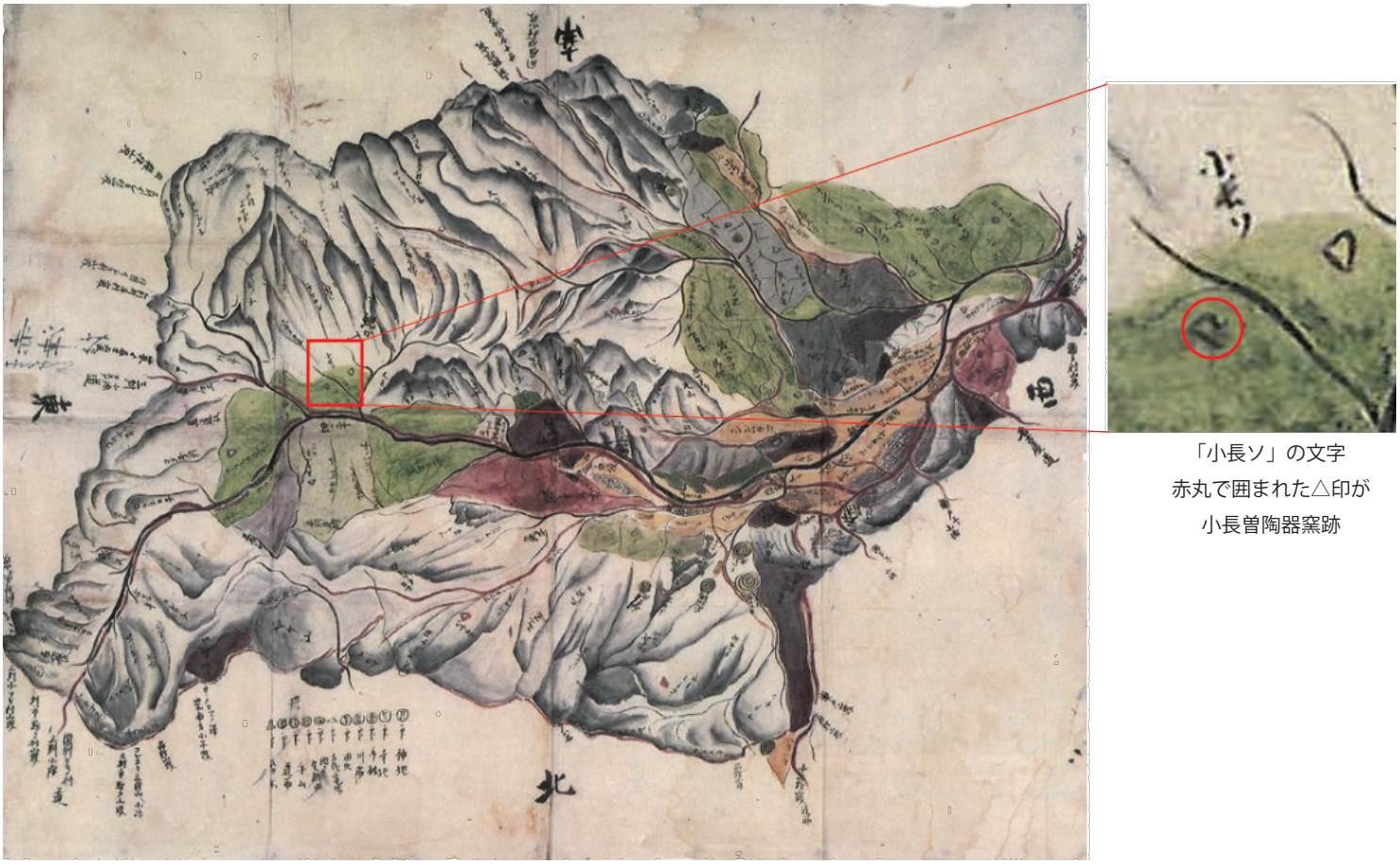


窖窯模式図

のようなものが見つかり、簡易的な上屋を伴う製品の乾燥施設があったことが明らかになりました。

本窯の遺物は、前庭部や灰原を中心に工房跡からも大量に出土していますが、そのほとんどが中世唯一の施釉陶器である「古瀬戸」と呼ばれる焼き物です。これらは概ね 14 世紀末から 15 世紀初頭に生産されたことがわかっており、本窯の操業年代が室町時代であったことが明らかになっています。

ところで、本窯については古くからその存在が知られていたようで、江戸時代の「春日井郡赤津村絵図」には窯場として「小長ソ」の名がみえ、また、天明八年（1788）に完成した『張州雑志』には、「藤四郎藤九朗時代古窯地名」の 1 つとして紹介されています。さらに同書には、「平・小長曽の窯元禄十二年（1699）、（藩主の）命ありて彦九郎これを焼く」と記されており、このことから室町時代に操業した窯を、江戸時代に再利用したと考えられていました。そうした中で、平成 12 年に行われた発掘調査において、前庭部から江戸時代のものと思われる大量の茶入をはじめとした当時の遺物が見つかり、窯の再利用が明らかとなりました。


「小長ソ」の文字
赤丸で囲まれた△印が
小長曽陶器窯跡

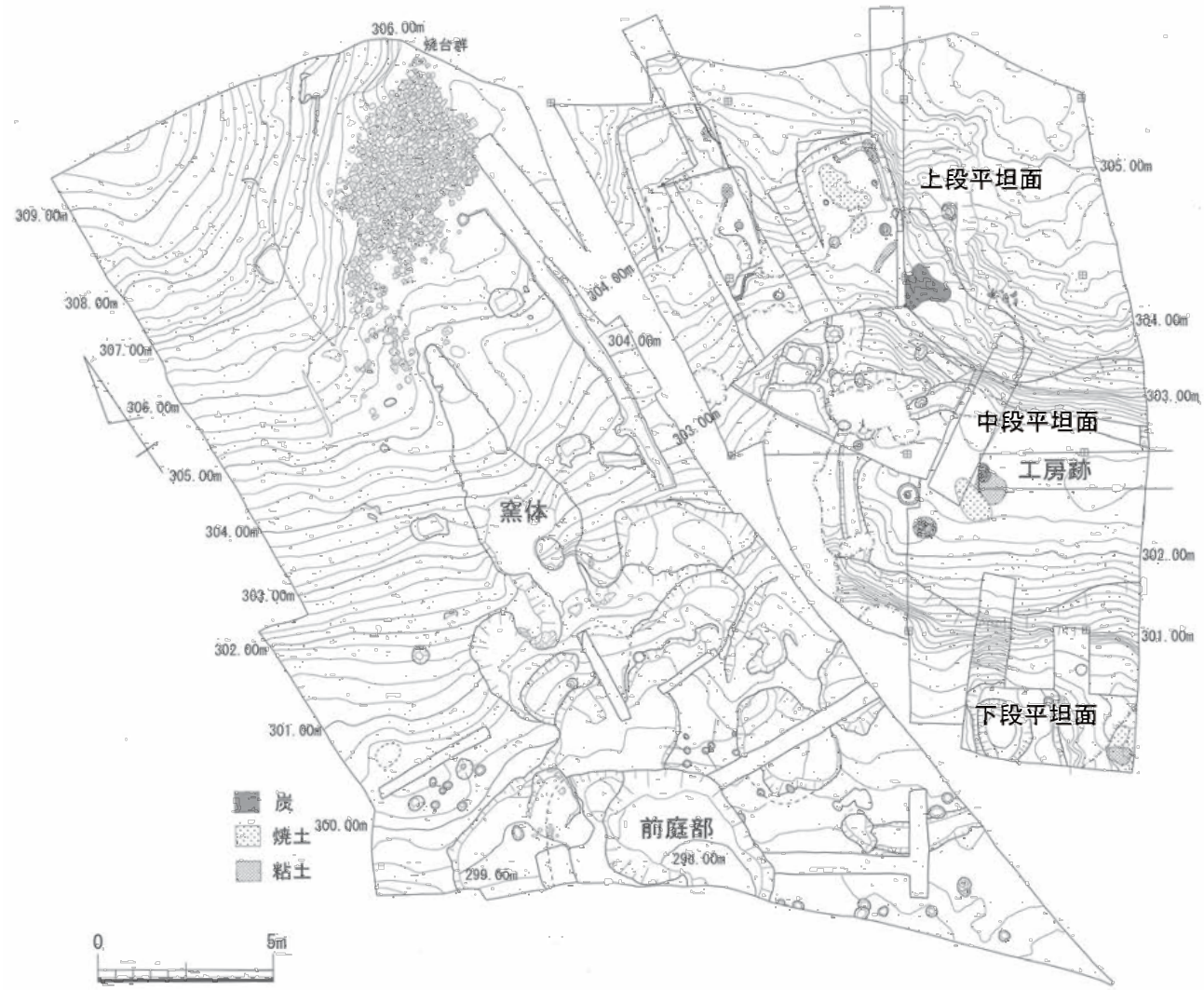
春日井郡赤津村絵図（江戸時代・年不詳）

窯体全景：写真中央にみえる、トンネル状の遺構が窯体本体です。焚口～燃焼室部分は大きな石を埋め込んで側壁としています。窯の内部には焼成室中ほどに天井から垂れ下がった障壁と小さな柱状の遺構がみられますが、これは江戸時代に再利用する際に付け加えられたもので、室町時代にはなかったと考えられます。

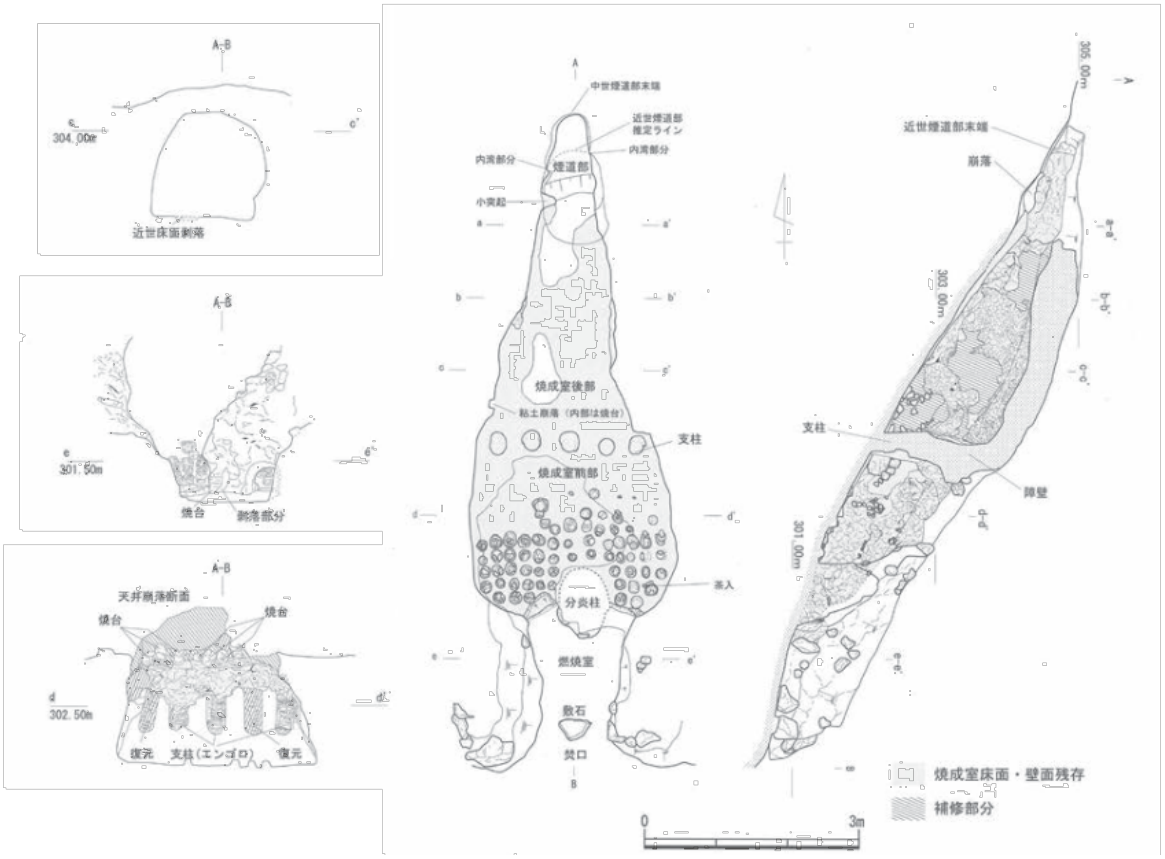
遺物出土状況：窯体手前の前庭部と呼ばれる平坦面で、東西約 5 m、南北約 4 m、深さ約 1.5 mの大きな穴が見つかり、この中から茶道具である茶入が 40 個体ほど出土しました。これらは全て江戸時代のものと考えられ、尾張藩から注文を受けて生産したものである可能性が高いと思われます。

乾燥施設：工房跡の上段で検出された施設です。上段はなだらかな斜面になっており、そこに幅約 3.5 m、奥行き約 4 mの平坦面が造成されていました。検出された平坦面は合計 3 つで、柱穴が検出されたことから、簡易な上屋が設けられていたと考えられます。

灰原の堆積状況：前庭部からさらに斜面下方には、当時の失敗した製品や、窯から出た炭が大量に投棄してあり、深いところでは 1.6 mの炭の堆積が確認できました。出土した遺物は全て室町時代のもので、当時の生産量が極めて多かったことを物語っています。



小長曽陶器窯跡遺構配置図



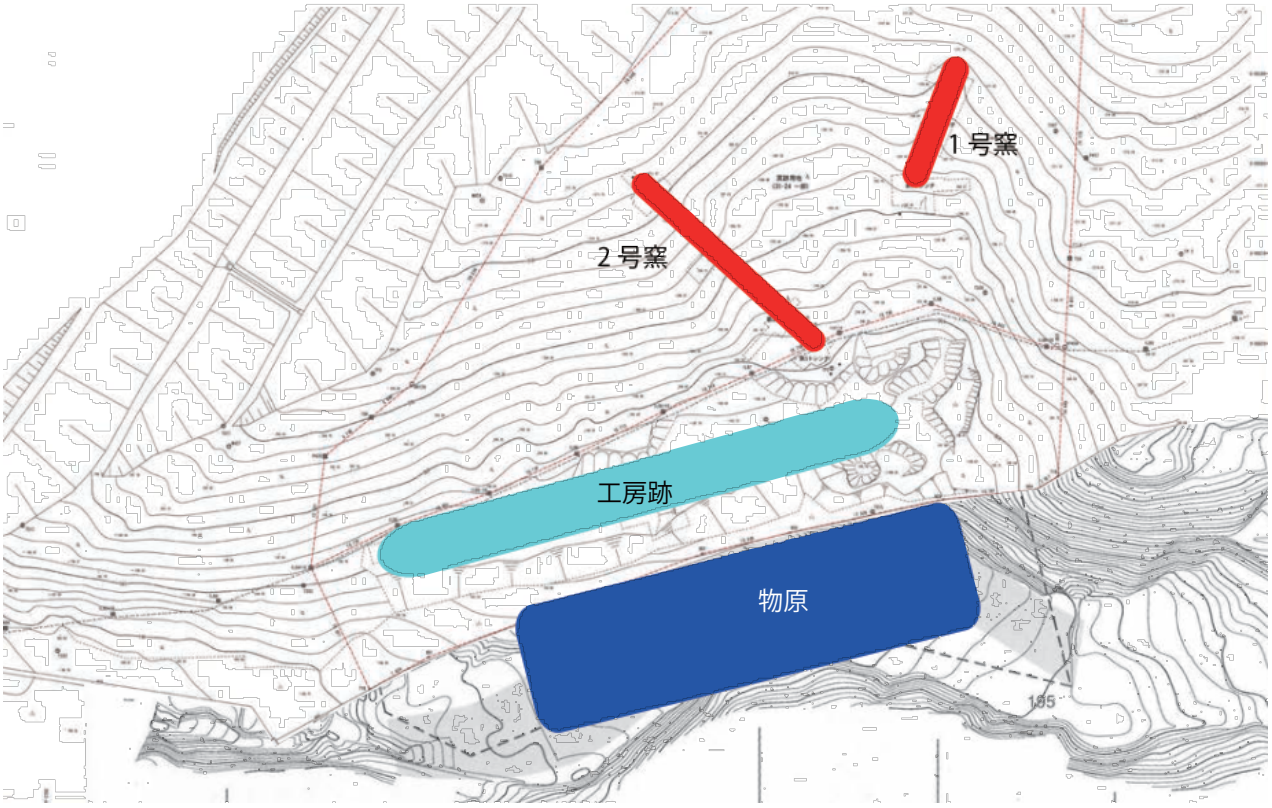
小長曽陶器窯跡窯体実測図

瓶子陶器窯跡

瓶子陶器窯跡は、赤津地区 (旧赤津村) のほぼ中央部に位置します。赤津盆地を形成する赤津川の左岸で、その支流の小谷を南側に臨む丘陵斜面の標高 195 ～ 210 mの位置に、17 世紀中頃から末にかけて操業された、2 基の連房式登窯と工房跡が所在します。

赤津地区は、その山間部で鎌倉時代から戦国時代にかけて「古瀬戸」と呼ばれる施釉陶器や山茶碗を焼いた窖窯・大窯が数多くみられます。しかし、16 世紀後半に陶工のほとんどが美濃窯に移動し、赤津のみならず瀬戸窯全体の生産活動が確認できない期間があります。その後、慶長十五年 (1610) に名古屋築城が始まると、尾張藩により陶工が赤津をはじめ瀬戸・下品野に呼び戻され、再び窯業生産を活発に行うようになります。中でも、旧赤津村では藩の御用も務めた「御窯屋」(加藤利右衛門・仁兵衛・太兵衛) も所在し、尾張藩との結びつきが強い生産地である点も特徴的です。赤津地区の江戸時代の窯跡は赤津盆地を北から西側に囲む丘陵斜面に立地し、現在の集落・陶磁器工房の中心部とも重なる例がほとんどですが、瓶子陶器窯跡はその盆地対岸に位置し、やや特異な立地となっています。

これまで、瓶子陶器窯跡の主な発掘調査は２回行われています。①平成 10・11 年度に窯体と工房跡の位置を確認するための確認調査 ((財) 瀬戸市埋蔵文化財センターによる)、②平成 15 年度に遺跡南側の谷部分を対象に東海環状自動車道建設の事前調査として行われた本発掘調査 ((財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターによる) です (名称は当時)。



瓶子陶器窯跡遺構配置イメージ図（1：800）

※（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター 2005 より転載・加筆

瓶子窯跡で行われた発掘調査では、窯体２基と工房跡、そして物原が確認されました。

２基確認された窯体のうち、東側の南向き斜面にが１号窯が確認されました。残存長は15.4 mです。下からみて前半部が「大窯」構造、後半部が「連房式登窯」構造をなしており、「大窯・連房連結窯」(仮称)と呼ばれている特殊な構造です。

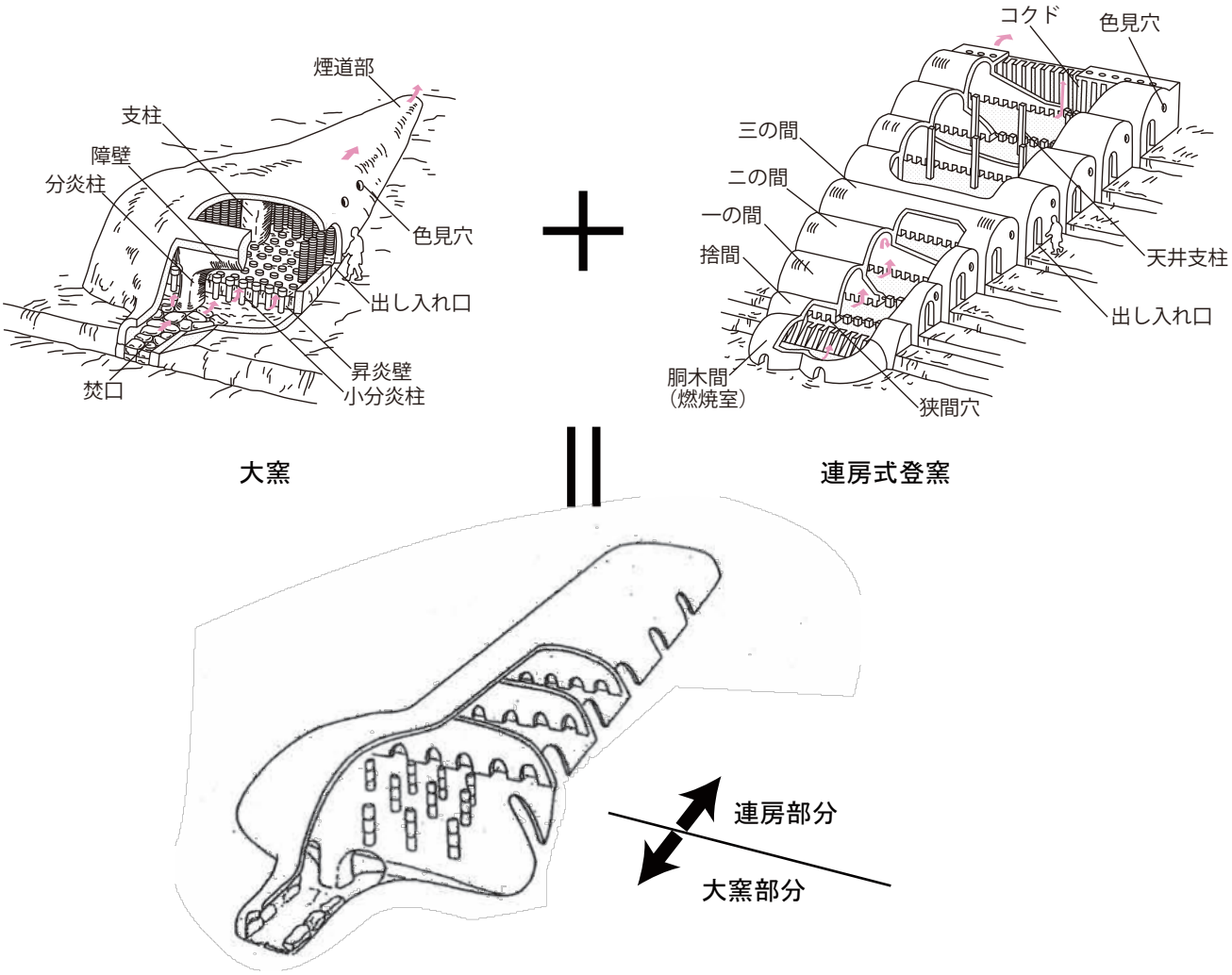
窯体前半部に燃焼室と大きな焼成室が続く大窯部分は、燃焼室が長さ１m・幅0.6 mで、奥行2.8 m以上・推定幅3.92 mの焼成室が続きます。

後半部は、６房の連房が確認され、各房はわずかに段をもつ有段式斜狭間構造で、幅は2.4～2.9 m・各房の奥行は0.9 mです。

出土遺物は、17世紀末の最終焼成品が確認されています。

２号窯は、１号窯から小支谷を挟んだ西側の南東向き斜面に構築されていました。有段斜狭間構造の連房式登窯で、残存長は28.3 mです。４か所の確認調査から、14～15房の焼成室であったと考えられます(窯体の模式図はP12「陶窯」参照)。

最も下方の燃焼室は、平面形が不整形な逆台形で、奥に直径0.7 mの分炎柱とその左右に高さ0.7～0.8 mの昇炎壁があります。燃焼室に続く焼成室第１室の幅は2.5 m、他の焼成室はいずれも2.6 mで、第４室の前後の狭間柱間の奥行は1.5 mです。出土遺物は17世紀前葉からのものがみられますが、最終焼成時の床面出土遺物は17世紀後葉のものでした。



瓶子１号窯跡模式図

瓶子１号窯　窯体図（1：100）

大窯部分（前半部）の全景

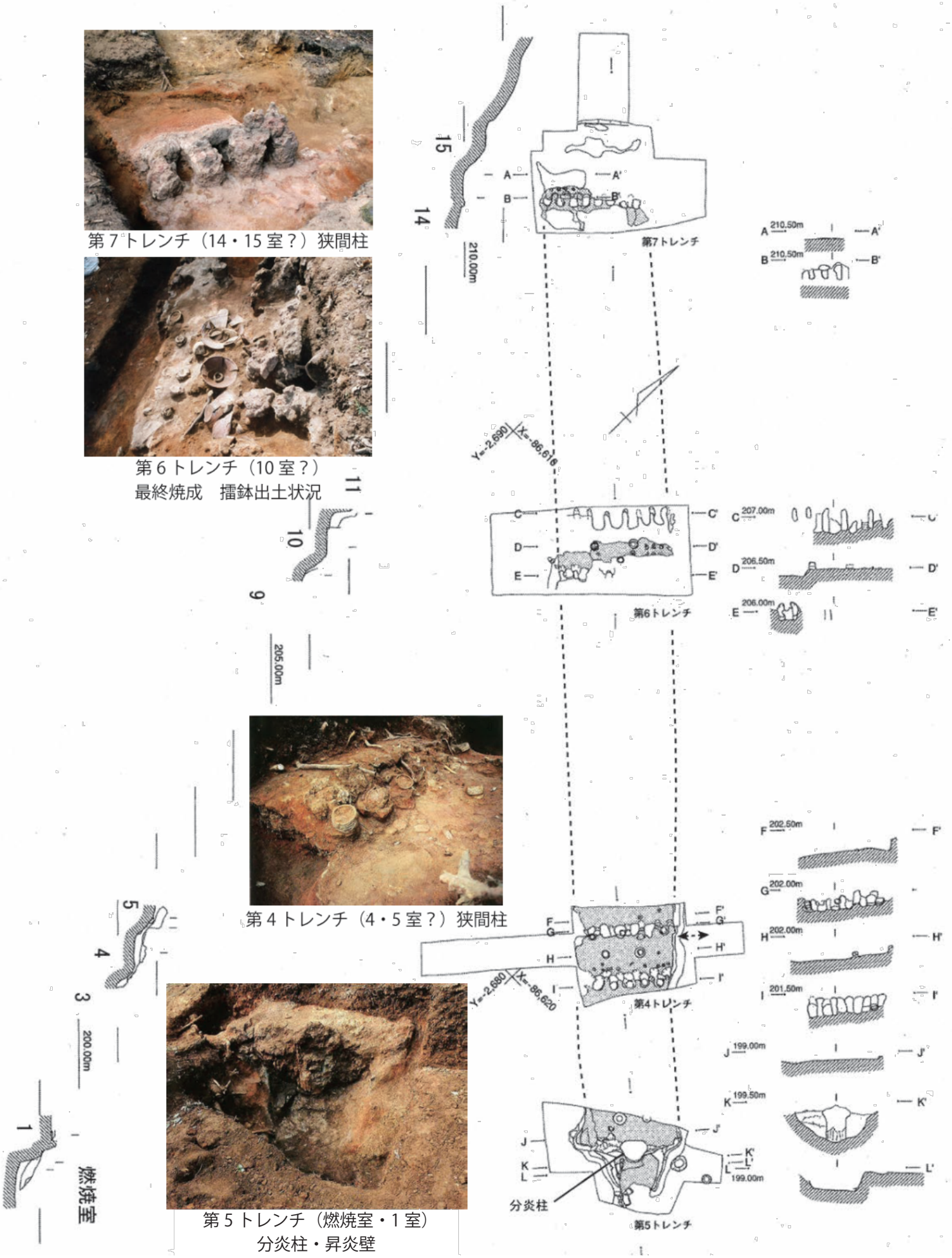
連房部分（後半部）の全景

第７トレンチ（14・15 室？）狭間柱

第６トレンチ（10 室？）
最終焼成　擂鉢出土状況

第４トレンチ（4・5 室？）狭間柱

第５トレンチ（燃焼室・1 室）
分炎柱・昇炎壁



瓶子２号窯　窯体図（1：100）

確認された窯体２基の南西側には瓶子陶器窯跡の工房跡と考えられる幅８ｍ前後の細長い平坦面がみられます。平坦面は、２号窯焚口から３段確認され、最も東側で２号窯焚口に最も近い平坦面１は、南側に石積を設け、西隣りの平坦面２との間に土管を埋設した排水施設を設けています。これまでの調査では、柱穴や建物礎石等の遺構は確認されていませんが、地磁気探査によって熱変化した可能性の高い部分も未調査部分で検出され、今後の調査によりその詳細が明らかになると思われます。

工房跡（平坦面１・2）の遺構検出状況（東から）左手は南側の小谷。右手は２号窯のある斜面

工房跡（平坦面１・２の境界）石積遺構・土管を用いた排水施設の検出状況（北西から）

瓶子陶器窯跡からは、江戸時代前期に生産された多様な製品が出土しています。

平成 10 年度の確認調査では、1 号窯の燃焼室内から素焼きの茶入が 10 点並べられた状態で出土しています。この地での操業最終段階で、あるいは窯場を閉じる際の供献的な儀礼に伴うものではないかと考えられています。

平成 15 年度の発掘調査では、南側下方の物原 (生産品 (不良品等) などの廃棄場所) から 3940 点もの資料が出土しています。

日常品の調理具・貯蔵具である擂鉢 (701 点 (17.8%)) や銭甕 (411 点 (10.4%)) 等が多い一方で、茶の湯に用いられた天目茶碗 (670 点 (17.0%)) やその他の碗類 (568 点 (14.4%))、特注品である茶入 (722 点 (18.3%)) も多く、大型の型打皿・花瓶の存在も注目されます。

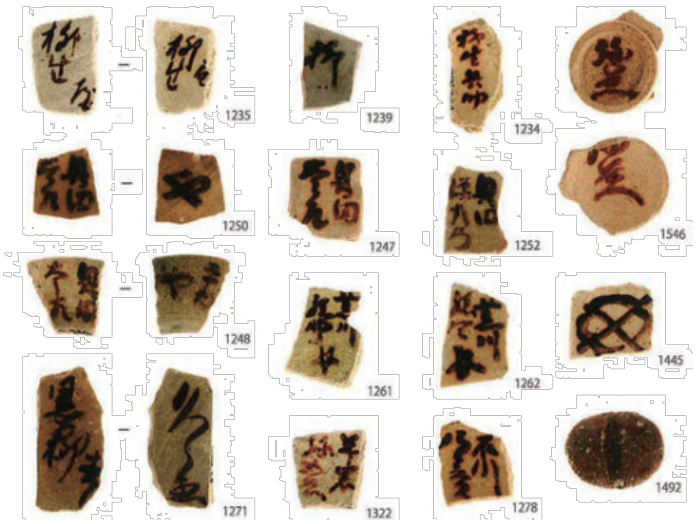
さらに、この他注目されるものとして、人名が書かれた陶片（付け札）が挙げられます。陶片が示す人物は、尾張柳生の一族である「柳生兵助（柳生兵庫厳包（やぎゅうひょうごとしかね））」をはじめ、「下方太郎兵衛」、「石川八郎兵衛」などといった尾張藩士であり、本窯で彼らが注文生産を行っていたことが明らかにされています。

【参考文献】
(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2000「市内遺跡調査報告Ⅱ　瓶子窯跡」
（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2005『瓶子窯跡』

物原出土の茶入

茶陶類（天目茶碗・筒形碗・各種碗類）と
特注品（木葉形皿等）

量産器種（皿・鉢・盤・壺・瓶・甕・香炉等）

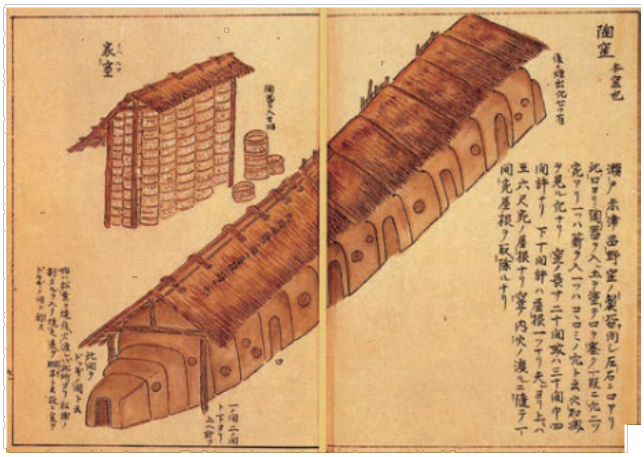


尾張藩士の名前が書かれた付札

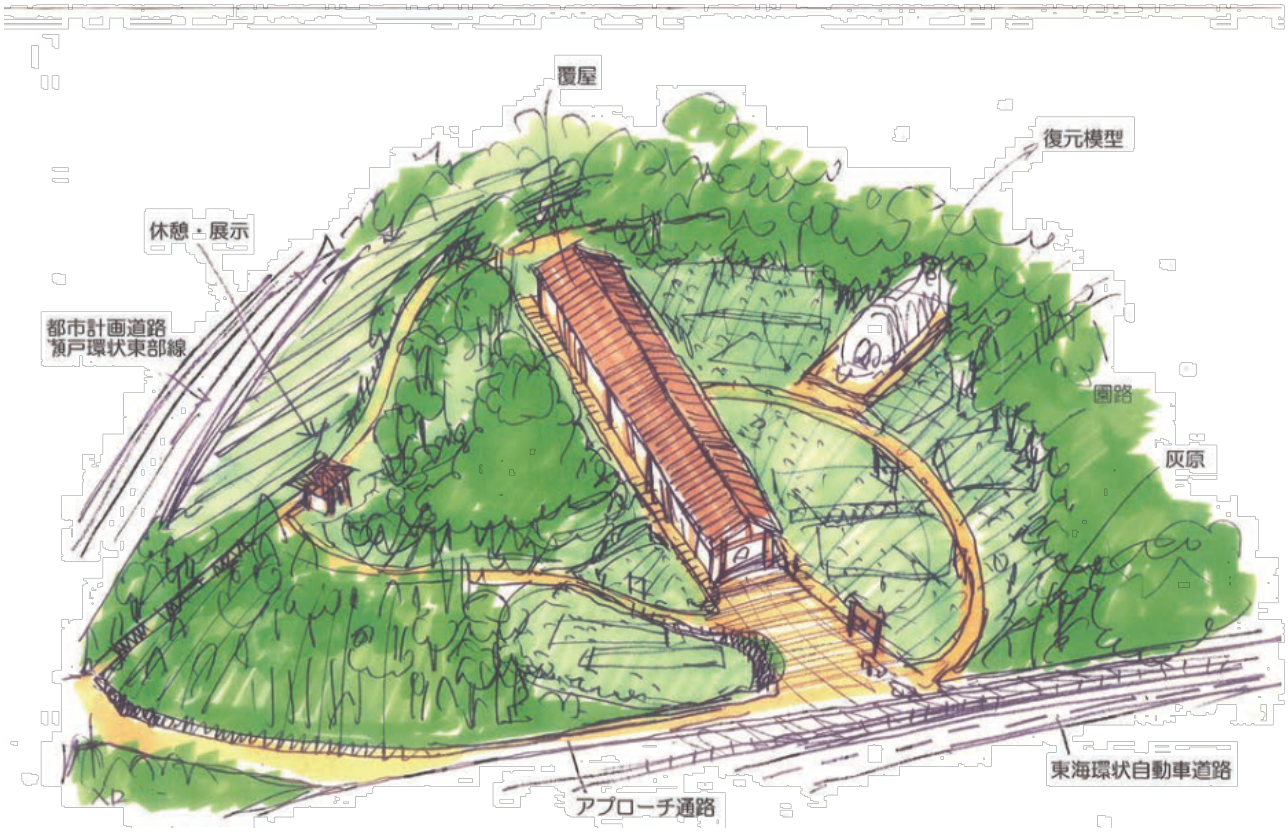
※全て（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター 2005 より転載

瓶子陶器窯跡の整備へ向けて

これまで説明してきましたように、「瓶子陶器窯跡」は、瀬戸窯跡の歴史を物語る上で、欠くことのできない貴重な遺跡であることがわかっていただけましたでしょうか。この貴重な文化財を、もっと身近に、圧倒的な存在感を体感できるようにしていくために、瀬戸市は地域の方々とともに、文化庁や愛知県の協力を得ながら今後保存と整備をどのようにしていくか検討を重ねて参ります。



『張州雑志』（1788 年完成）に記載された
瀬戸・赤津・品野の「陶窯」



瓶子陶器窯跡の保存計画イメージ図

（瀬戸市教育委員会 2002『瓶子窯跡整備基本構想報告書』より）

今後のスケジュール

＜11月＞

せと歴！　江戸時代のやきものづくり－連房式登窯の焼成実験の見学
（愛知県陶磁美術館との連携企画）

日　時：11月15日（日）　午前10時30分～12時30分・午後1時～3時
集合・解散場所：愛知県陶磁美術館　大駐車場古窯館前
★定員各部20名

せと歴！　秋の馬ヶ城－歴史と自然を巡る－Part 2

日　時：11月28日（土）　午前9時～12時・午後1時～4時
集合・解散場所：馬ヶ城浄水場
★定員各部20名

瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～１０００年以上の歴史を誇るせとものの まち 陶都瀬戸～」を開設しました。
これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：http://seto-guide.jp/

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団